

グループワークを基盤とした パフォーマンス評価の実践と「質」の追究 —「知識・技能を活用する力」の評価をめざして—

169981

藤村 一輝

主指導教員：中西 修一

1. 背景

現行学習指導要領では21世紀が「知識基盤社会」と呼ばれ、知識・技能を習得するだけでなく、それを活用して深く考える力が求められている。しかし、パフォーマンス評価を定期テスト内で行うのは、決まった時間で複数の問題を解かなければならないため、難しい。そこで、筆者は授業内でパフォーマンス評価を実施し、生徒の「知識・技能を活用する力」を細かく評価することが重要であると考えた。

2. 目的

本研究の目的は、次の2つの仮説を検証することである。

| | |
|-----|--|
| 仮説① | 小テストの点数を S-P 表（佐藤、1982）で分析して、パフォーマンス課題の作成と生徒のグループ編成に活用すれば、パフォーマンス評価の質は上がる。 |
| 仮説② | 自己評価とそれに対するフィードバック（教師からのコメント）によって、生徒は教師と同等の評価をすることができるようになる。 |

3. 研究方法

| | | |
|-----|--|--|
| 仮説① | ○教員による評価 S-P 表の分析結果を基に、パフォーマンス課題の小問を作成。その課題のワークシートを教員が評価し、評価の「質」が向上したかを分析。 | ○グループ編成 S-P 表の分析結果を基に、知識・技能にむらのないグループ編成を実施。「(能力的な) 協力しやすさ」「人間関係的なやりにくさ」をアンケートで分析。 |
| 仮説② | ○自己評価 ほぼ毎回、同じグループリクを用いて自己評価させ、評価理由の変化によって、生徒と教師の評価視点の共有度合いを分析。また、アンケートも実施。 | ○相互評価 1 人の生徒に対して 2 人の生徒が評価。 $m = \frac{\sum (\text{一人目の評価}) - (\text{二人目の評価}) }{(\text{生徒の人数})}$ m の値で生徒ごとの評価の差を分析。 |

4. 成果

表 1: 「教員による評価」の結果 (実践研究Ⅱ)

| 評価規準 | | 式の立て方 | 解法の考え方 |
|------|------|--------|--------|
| 平均 | No.3 | 4.48 | 4.31 |
| | No.6 | 3.54 | 3.00 |
| | t 値 | 3.60** | 4.72** |
| 分散 | No.3 | 0.71 | 1.09 |
| | No.6 | 1.91 | 2.08 |
| | F 値 | 2.53** | 1.75** |

(* : $p < 0.1$, ** : $p < 0.05$)

※1~5 点で評価

※No.3 : 「S-P を活用していないパフォーマンス課題」

No.6 : 「S-P 表を活用したパフォーマンス課題」

表 3 : 自己評価による評価視点の共有 (実践研究Ⅲ)

| 評価規準 → | 積極性 | 途中式 の考え方 | 解法 の考え方 |
|-----------|--------|-------------|------------|
| A 組 | 4.50** | 0.14 | 0.14 |
| B 組 | 0.20 | 6.00** | 0.09 |

※表中の数値はマクネマーの有意変化の検定で使した χ^2 値

(* : $p < 0.1$, ** : $p < 0.05$)

表 2 : グループワークのアンケート結果 (実践研究Ⅱ)

| 項目 | (能力的に) 協力し やすくなった | 人間関係的に やりにくくなった |
|----|----------------------|--------------------|
| ① | 8 人 | 10 人 |
| ② | 12 人 | 7 人 |
| ③ | 19 人 | 22 人 |
| ④ | 8 人 | 8 人 |

①とてもそう思う、②そう思う

③あまりそう思わない、④全くそう思わない

※上の 8 人は同 1 人物

※実践研究Ⅲでグループをつくるタイミングを早めることにより、「人間関係的にやりにくくなった」で①、②を回答している生徒の一部を③、④に変えることができた。

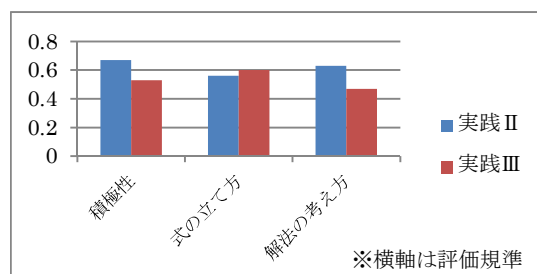


図 1 : 相互評価の差の平均 m の比較 (実践研究Ⅲ)

5. 考察

| | |
|--|--|
| <p>○教員による評価 (表 1 より)</p> <p>S-P 表によって、評価の「質」は向上した。その理由は、S-P 表から導出した生徒の苦手傾向を把握できたからだと考えている。</p> | <p>○グループ編成 (表 2 より)</p> <p>「人間関係的なやりにくさ」を感じていない生徒は「協力しやすさ」を感じており、グループ編成は効果的だったと考えられる。</p> |
| <p>○自己評価 (表 3 より)</p> <p>「解法の考え方」において、自己評価の効果はなかった。それは、評価対象が授業ごとに变化するからであろう。他の 2 つの評価規準においては、効果的だったと考えている。</p> | <p>○相互評価 (図 1 より)</p> <p>「式の立て方」でのみ m の値は上がっているが、この評価規準は自己評価シートにはない評価規準である。ゆえに、生徒間での評価視点は近くなったと考えている。</p> |

6. まとめ

2 年間の実践研究で、仮説①の立証には成功し、仮説②も一部は立証できた。このことから、生徒を評価者にすることや S-P 表を活用することで、生徒の「知識・技能を活用する力」を見出すことができたと考える。今後は、ルーブリックの工夫により、評価活動を充実させたい。